


 書評

茅野淑朗 著

Schizo-Oligophrenie 統合失調症様 症状を呈する発達遅滞

臺 弘

本書は誠実な精神科医であった著者が、真摯な臨床の一生をかけて孤独に取り組んだ課題である「精神病とは何か」についての考察である。評者は不思議な因縁で本書の発端からかわり、今回は書評を引き受けることになった。亡友の依頼を断るわけには参らない。本書は独特な構想と論議の著作であるので、まずは原点と大綱を吟味する必要がある。

著者は本書の主題が① Schizophrenie の本質的な症状は対人感情障害にあるとする見解、② Schwachsinn を知的障害より人格障害とする観点、③ 表現症状群 (Ausdruck-Symptomenkomplex) の記述に依存する解析法にあるとしている。分裂病の中軸症状を対人感情障害とする立場は、わが国では立津政順に発する。彼は慢性覚せい剤中毒精神病と分裂病との鑑別に当って「打てば響くような反応を持つ人は分裂病ではない」と喝破した人である。松澤病院で立津に学んだ青医連は本書では M-Schule と呼ばれており、著者はその末輩にあたる。評者も「打てカン」反応には賛成していて、分裂病として来診した 1 女患者との会話に何気なく「貴方、薬使ったことあるの」と聞いたら、「ええあるわよ」と即答された。彼女が以後 20 年間も薬の濫用を繰り返し、見る影もない欠陥状態で入院を続けていると聞いたのは悲しい。一方評者らは動物の慢性覚せい剤中毒が統合失調症モデルとなることを提唱していて、本症が人間特有の疾患であるとは認めていない。

20 数年前に著者は評者に対して「精神分裂薄弱症」と称する変な新病名を講釈したことがあった。当時は精薄の接枝分裂病とどこが違うのかと聞いても明確に答えられなかったが、それは著者にとって長い懸案になっていて、今回の Schizo-Oligophrenie となる宿縁の課題であ

った。現在の評者の理解によれば、それは統合失調症の疾患としての要件である「人格水準低下」「欠陥・残遺状態」や「純粹基底欠陥」などの、「心的エネルギーの減退」ともいわれる正体不明の重要な現象の主体であり、それらは「分裂性特有症状群」や「経過と転帰」などと並んで、診断、臨床、治療とリハビリ、さらには病因の究明に必須な要件であった。方法論的には ICD や DSM の現象記述による症状論や ICF の認知・行動計測による障害論が区別されるし、「非定型精神病」の鑑別や Huber G の基底症状評価尺度 BSABS などを連想される方もあろう。評者はこれらの問題は定性的な症状論ではちがいが明かないと見切りをつけていて、定量的な障害論による簡易精神機能テストなどを開発して宣伝し、それを著者にも講釈しようと思っている間に、その機会の失われたのは残念であった。

本書には懸案問題に対する著者の解答が述べられることはないし、臨床に役立つ教訓が与えられているわけでもない。ただ精神科医なら避けて通れない難問を、著者とともに自分自身の課題として考えることが余儀なくされている。もし読者が「精神病とは何か」を真っ向から考えようと願うのであれば、本書はそれに立ち向う際の貴重な文献となり、またそれを一筋に求めた孤独な努力に敬意を払うであろう。参考資料の 2 編を許されたい。

- 1) Huber G 著、林拓二 訳：精神病とは何か—臨床精神医学の基本構造。新曜社、2005
- 2) 臺 弘：精神医学における障害概念の成立とメカニズム。精神科臨床サービス 4：292、2004

(坂本医院)

● A5 331頁 2006 定価3,780円 (本体3,600円+税) 創造出版